

## 生研の 50 年

第 4 部教授  
国際連合大学副学長 (第 18 代所長)

鈴木基之



戦後の我が国は産業技術の発展による経済成長を遂げ、一人当たりの GNP は世界のトップクラスとなった。生研は我が国の第二次大戦後の復興の始まる時期に設立され、以来、国の高度成長、安定成長、バブル経済の崩壊など大きな変化の時期を背景とし、大学における科学技術の総合的な研究機関として、その時その時の産業技術の発展に関与してきたといえるであろう。勿論、これは多くの大学における工学研究に何らかの意味で共通している訳ではあるが、本所の特徴的な面は、産業界との連携を一步踏み込んだものとする努力を重ねていたところにある。

今後、これ迄のような高度成長の時期を迎える事はないであろう。量的な価値から質的な価値を求める時代に入っていく。この時期に、人間活動が地球的制約の下で、また物的な成長からより文化的な価値の成長へと進化していくプロセスの中で科学技術そのものがどのように進化していくことが求められていくのであろうか。そして国際社会の中における我が国の、あるいは人類全体の発展に寄与できるものは何かを冷徹に見据えて、次の 50 年における工学研究所の進路を設定する必要があるであろう。本所はその責務を負っていると言って良い。何故なら本所ほどこれらの問いに答えるにふさわしい研究所はないからである。

本所は年齢層に大きな分布を持つ約 100 名からなる工学系の教官がそれぞれの独自の研究室を主宰し、それぞれの分野における学会等で切磋琢磨することは勿論、所内においては異分野と隣接することによって、それぞれの研究スタイルについても対比しながら研究を進めている。若い時期から経営感覚を学ぶ機会も多く、新しい学問領域を切り拓いていくのにも、これ程適した仕組みは少ないであろう。

さらに本所は常に、ほぼ常設されている将来計画委員会において工学研究所としての進路に関して検討を続けている組織でもある。通常の大学の形態としては珍しいものであろう。しかし、国立大学として国民に負っている使命を考えると、これは当然の活動であった。そしてまた、将来の計画を考える上では、常に自分の置かれた状況に対する客観的な認識が必要である。

本所は特に 1995.6.7 の三年をかけ、3 回にわたる外部評価を受けた事が特筆される。国際パネル、産業界パネル、学界パネルをそれぞれ際立った経験を有し活動をおられる方々により構成し、本所の国際的な活動の面、産業界との連携を見据えた研究活動の面、総合的な学術面からの評価を受けた事がそれに当たる。生研としての全く自主的な意図に沿って行われたものである。この評価は原島所長の時期に準備が始められ、小生が所長を務めた三年間に行われたもので、その際の作業、実行に関わられた多くの教官、職員の方々の献身的な共同作業には改めて本所の実力を認識したものであった。この評価の結果は、所としては大いに力づけられるものであったと同時に、今後の新しい展開に際しても参考とさせて頂くものが多く、当に努力の甲斐があったと言えるものであった。この結果を活かし、現在進行中の大事業である駒場新キャンパスへの移行に際して、大胆な将来像を描く事が必要であろう。

生産技術研究所は周知のように、戦争中に発足した東京大学第二工学部が戦後に研究所として転換改組されたものである。この移行の時期の種々の経緯、その時期に起こった種々の困難な事態とそれを解決すべくなされた先輩諸賢の御努力については本所の 50 年の歴史の中で、語り継がれ、特に研究所設立に際して、極めて先見的な哲学に基づく生研の組織形態、運営方法の確立など、常に理想を実現する形でなされた努力は現在の生研の文化・形態に大きな影響を及ぼしたものであると言って良い。

物から文化への価値が転換する今後の 50 年の時代に生研がどのように展開していくことになるのかを予想するのは勿論容易ではない。しかし、50 年の歴史を持ち、人間であれば「知命」の年となる。知命、即ち天命を知る年を迎えたということである。本所としては、生研のような存在であるから出来ること、また生研でなくては出来ないことは何かを考えていくことであろう。言い換えれば、前述した本所の特徴的な研究態様を大いに活かし、今後の世界に対する科学技術の貢献は何かを考えつづけることが必要であり、この混迷の時期にそれに対する期待は誠に大きいものである。